

新聞を読み、テレビをつけてニュースをチェックしたが、封鎖については相変わらず規制された報道と検閲済みの情報しかなかった。自分のパソコンはアパートに置いたままで。COMPは持っているが、複雑な入力の出来ないこの端末はパソコンの代わりに使ならない。

従弟が起きてきたのはそれから一時間後だった。

「おはよう。ああお腹空いた」

「何を食べたい？好きなものを作るけど」

「とりあえず早く食べられる物。食べたい物は後でリクエストするから！」

「はいはい。じゃあもう少ししたら買物に行ってくるから、それまでに考えておいてね」

食事を摂ってすぐに夕夜は部屋に戻った。主に学校の友人から安否を気遣うメールがたくさん届いていて、それに返事をしなければいけないのだという。

パソコンが無く、今後の見通しも全く立っていない現在、ナオヤにはやる事がなかった。

ぼんやりとソファに座っているよりはと伯母の買物につきあった。ナオヤの好物も全て覚えている伯母が次々と商品を買物かごに放りこむのを見守って荷物持ちを務めた。

(…：俺はいつたい何をやっているんだ)

夕夜を魔王として手中に収める為にはまだこの家族との繋がりを断たないほうがいい。だから自分の現在の行動は間違っていないのだと、彼はそう理由づけた。

「そういえば夕夜がお友達を呼ぶって言ってたわ。何でもせつかく家に帰れたのにご両親が海外赴任で一人なんですって」

(アツロウか。夕夜め、何を考えている?)

帰宅した後さりげなく訊いてみたが、

「だって家に一人じゃ寂しいだろ？それに、そのうち一緒にゲームやるうって夏休み前に約束してたし」

軽い口調で返されただけだった。自分が考えすぎたのだろうか。何でも読めていたはずの従弟の思考が全く読めないような気がする。それとも夕夜が思いどおりに動かなかった事で、柄にもなく弱気になっているのだろうか。

大きなバッグを抱えたアツロウがやってきたのは夕方頃だった。

「こんにちは。お邪魔します」

行儀良く伯母に挨拶して夕夜の部屋に荷物を置きに行く。その際ナオヤを窺って何か言葉をかけようかと迷っ

ていた様子だったが、ナオヤは無視してリビングへ戻った。

伯父の帰宅後、アツロウも交えて食卓を囲んだ。好物ばかりが並んだ食卓で夕夜はいつも以上によく食べたし、成長期のアツロウも同じだった。養父母が笑うのを眺めながら、ナオヤは普段は感じない疎外感を覚えた。

「せっかくアツロウが来てくれたんだしさ、これからリビングでゲームしてもいいだろ？」

「そうね、夏休みだし。でもあまり夜更かしするんじゃないわよ」

食事を終えた伯父は名残惜しそうに夕夜とアツロウを見遣つてから書斎を兼ねている寝室へ籠もった。封鎖の影響で伯父の会社でも多くの業務が滞って負担は相当のものらしい。息子が無事帰ったからと定時で帰宅したものの、仕事を持ち帰る羽目になったそうだ。

リビングのテーブルにゲーム機を準備して、夕夜はどこに座ろうかときよるきよるしていた。アツロウとナオヤがすでにソファに座っていて、空いている場所はテレビ画面を見るには角度が悪い。そこでナオヤが手招いてやると、彼は素直に従兄の膝の間に座った。それは昔の定位置だった。ナオヤの姿がこのリビングにあるのが久

しぶりで、それで反射的に昔と同じ行動をとってしまつたというところか。

「……ユーヤ？」

「何？ ……ああっ！」

アツロウに怪訝そうに問いかけられて、慌ててユーヤが場所を移動する。

「これは、そのっ……」

「お前の癖だったな。なあアツロウ、夕夜がどうして俺の膝に座りたがるか、教えてやろうか」

「え？ 何か理由があるんすか？」

「言わなくていい！」

慌てて真つ赤な顔で止めに入る夕夜にアツロウは形ばかりの遠慮を見せたが、目が知りたいと語っていた。

「ククク、小さい頃のこいつは我が儘でな。やつぱり一緒にゲームをやるうと言ってくるんだが、負けがこむと泣きだすのが常でな。泣くと始末に負えないから、泣きだす前に止められるように最初から抱えていたんだが、そのうち俺の膝の上でないと嫌だと言いだした」

「保育園の頃の話だ！」

「……その癖が未だに直らない。アツロウ、お前もあまり勝ちすぎてやるなよ」